

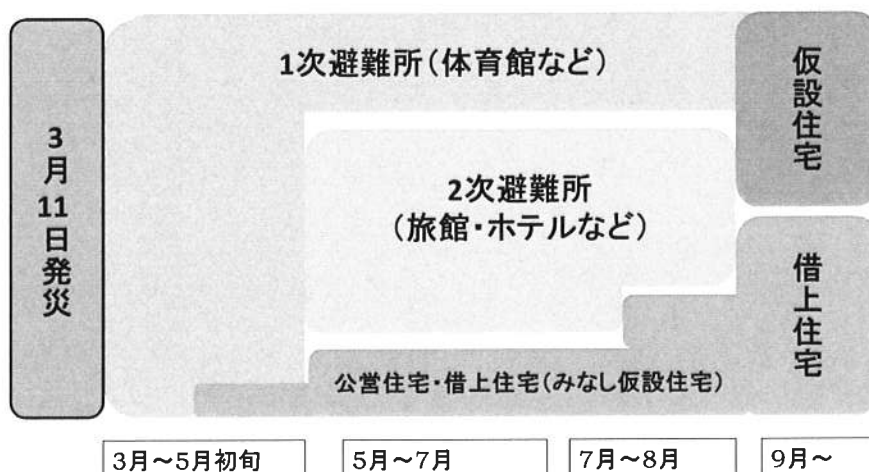
第5回 東日本大震災子ども支援意見交換会



2012年9月13日

特定非営利活動法人ビーンズふくしま
被災子ども支援部門 理事 中鉢博之

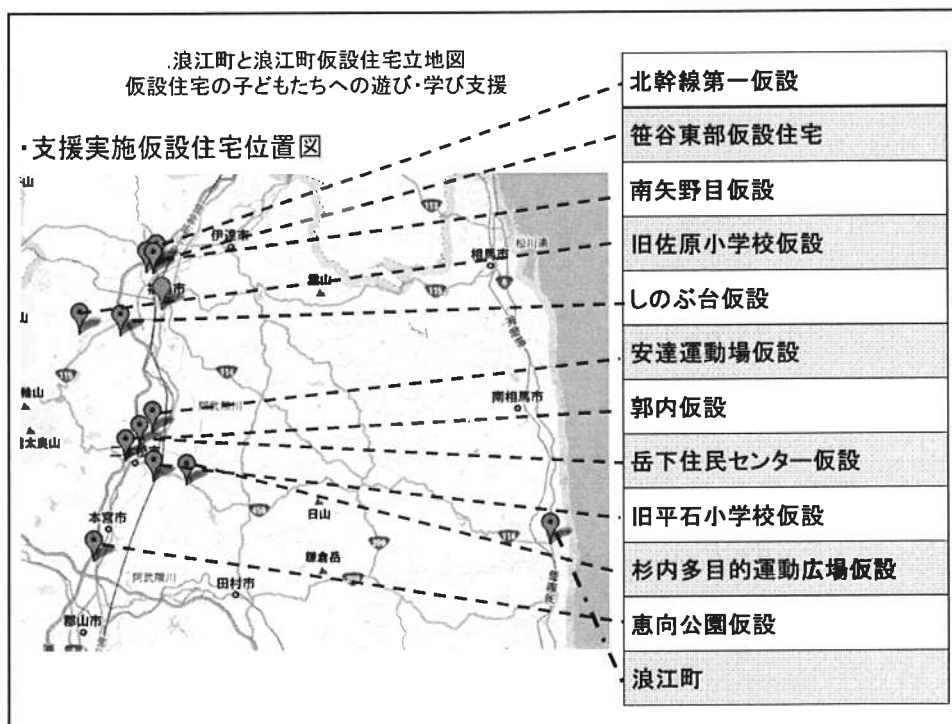
震災で福島県内で避難生活をしている子どもの生活環境



震災で福島県内で避難生活をしている子どもの生活環境

福島県浪江町の事例から

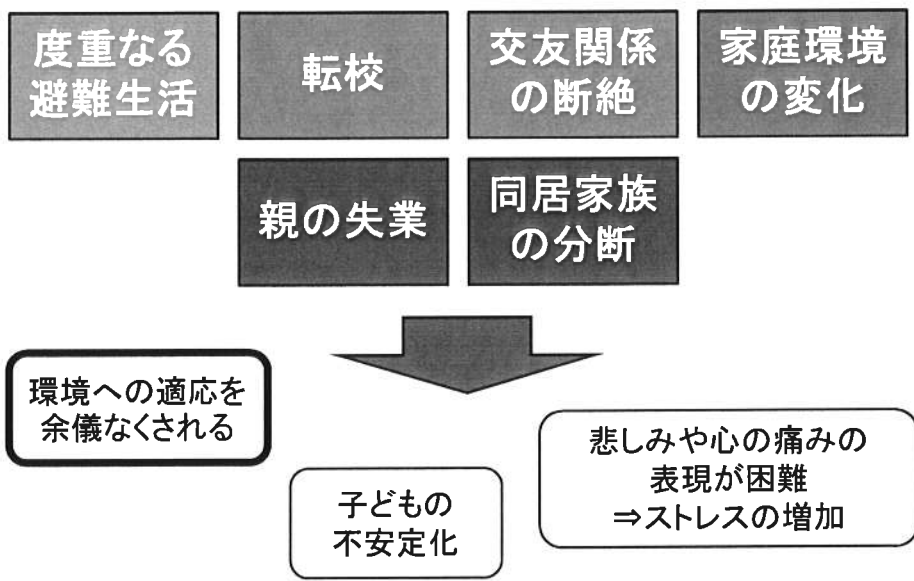
- ・原発事故により、町全体が警戒区域・計画的避難区域に指定される。
- ・人口約2万1000人のうち、約1万4000人が福島県内で、約7,000人が県外で避難生活を続けている。
- ・福島県内への避難といっても、浜通り(沿岸部)から中通り(内陸部)へ70km~80kmも離れた地域への避難。また桑折町、福島市、二本松市、本宮市など広域にわたって分散しての避難。
- ・避難前の小学校6校、中学校3校はすべて休校。(9月より浪江小学校・浪江中学校のみが二本松市内の廃校を使う形で再開) 児童・生徒のほとんどが、避難先の小中学校に区域外就学(子どもにとっては事実上の転校)という形で受け入れられている。



子どもの避難生活の状況（避難所の段階）

- ・必ずしも、避難所から近い学校に転校できたわけではない。
- ・避難所からそれぞれの親が送迎する形での通学の対応
- ・避難先の変更に伴う、移動・転校を繰り返す
- ・避難所という不安定な環境下での長期の生活

子どもの避難生活の状況



避難生活中の子どもの学習環境から見える課題

- 子どもの転校や生活の変化に伴う子どものストレスが大きい
- 落ち着いて学習できる環境にない
(住宅環境・生活や家族の環境)
- 避難生活で生活リズムそのものが崩れてしまった。
- 避難元の地域と避難先の地域での学力格差

心のケアや学習支援など子どもの中長期にわたっての支援が不可欠



学習支援の面で見ても・・・

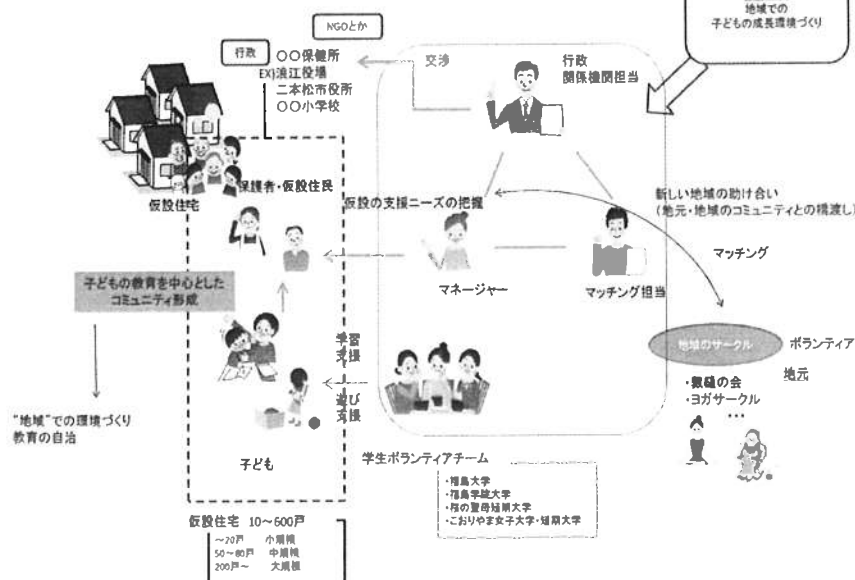
狭義の勉強指導だけでなく、学ぶ意欲そのものを支える支援が重要

仮設住宅での「学び」や「遊び」の支援
 ～被災した子どもによりそいながら、
 子どもを中心にした地域コミュニティの再生を目指す～

うつくしまふくしま 子ども未来応援プロジェクト



NPO法人ビーンズ うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト 全体イメージ図



プロジェクトの目標

(1)子どもの学習と遊びを支援し、子どもの元気を取り戻す

- 大学生や市民ボランティアが関わり、子どもの生活に寄り添いながらサポート

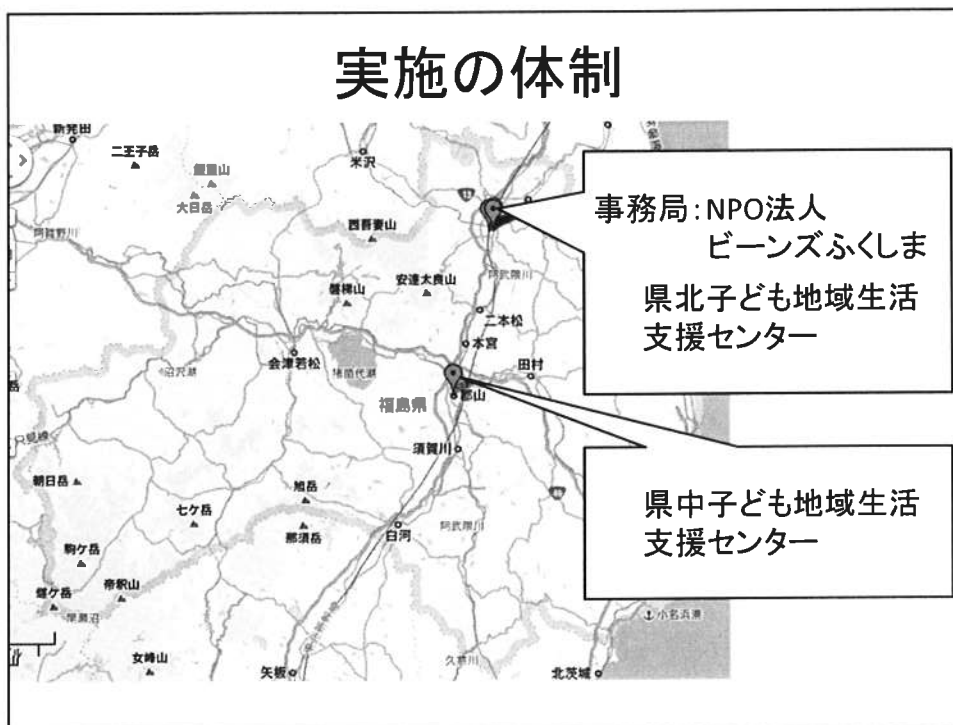
(2)大人が子どもたちに寄り添う地域を作る

- 子どもが安心して活動できる環境を地域の大人が考え、整える
- 地域の子どものと一緒に大人が活動する行事がある
- 子どもが地域の大人に、いつでも相談ができる

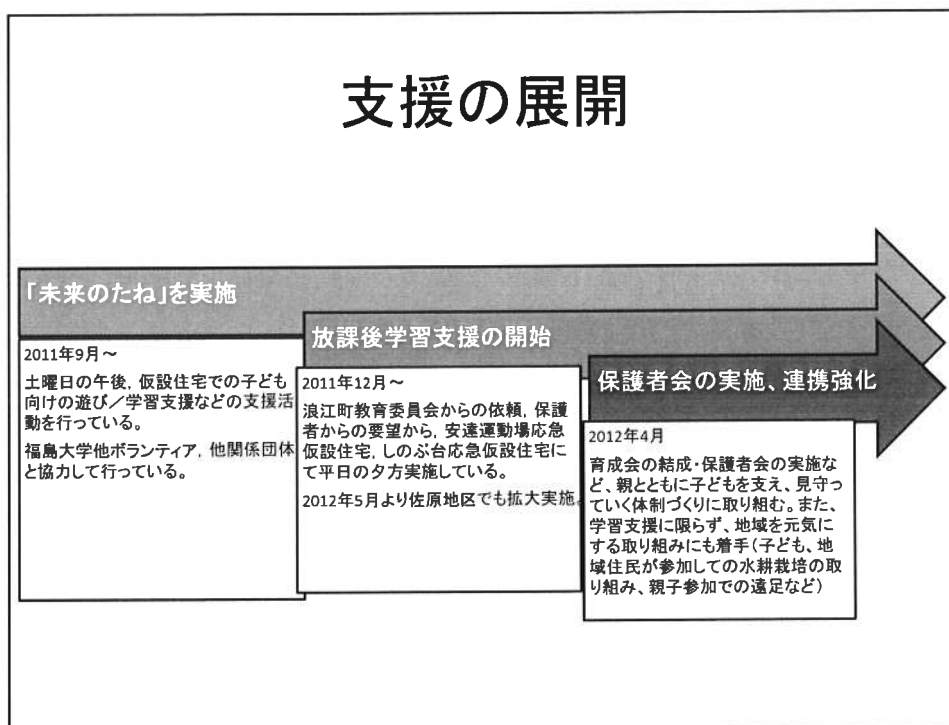
(3)大人同士もつながりあえる地域をつくる

- 子ども会育成会の結成や、自治会の活性化など子ども・子育てを軸にした地域コミュニティの形成

実施の体制



支援の展開



(1) 仮設住宅の子どもたちへの遊び・学び支援

(土曜日や休日での支援)

「ビーンズふくしま」と福島大学の学生ボランティアが中心となって、学習や遊びを通して子ども同士が関わり合いの中で育つ環境づくりを目指す。

・ 仮設住宅における支援活動の目的

子どもを持つ世帯の孤立の防止

- ・ 同じ地域の仮設住宅でも、学校や元々の地域が異なるなど、お互いに相手のことをよく知らないため、関わる機会があまりなかった。
- ・ 子どもたちの親も、年配の方が多い昼間のイベントになかなか参加できていなかった。

子どもを支えていく力を取り戻す

- ・ 子どもたちを支援しながら、地域の人や保護者がもう一度子どもたちを支えていく力を取り戻すことができるよう、仮設住宅の集会所に訪問する形で支援を始めた。

(1)仮設住宅の子どもたちへの遊び・学び支援

(土曜日や休日での支援)

- **実際に仮設住宅に入ってみて(みられた言動)**
- 大きな声を出して走り回る。
- ちょっとした事ですぐに癩癪を起こす。
- 自分よりも小さな子や、力の劣る子に「バカ」「しんしょう(※身体障害者を意味していると思われる)」等の暴言をはく。
- 学生や大人に対し、わざと怒らせるような言動を取る。
- 津波ごっこ、地震ごっこ等、災害時の状況を再現した遊びをする。
- 時間になってもなかなか帰りがらない、学生から離れたがらない。
- 「家に」帰るよう促すと、一瞬何とも言えない表情になる。

...など

(1)仮設住宅の子どもたちへの遊び・学び支援

(土曜日や休日での支援)

● 成果と課題

- 走り回って落ち着かなかった子どもたちが、工作の作業に集中できるようになったり、学生ボランティアの話を聞くようになってきた。
 - 学生との信頼関係ができてきた。
 - 学生と子どもが皆一緒になって行動する機会が増えた。(例:かまくら作りなど)
 - 癩癪を起してもすぐに治まるようになってきた。
 - 学習をしている中で、わからなかったところがわかることで、とてもいい表情をしている子どもが増えてきた。
 - 子どもたち同士のつながりができた。(違う学校に通っている友達もできた)
- ✓ 再編成の課題(子どもの少ない仮設住宅での活動を今後どうしていくか)
 - ✓ 学生ボランティアの引き継ぎの課題(学生の次世代継承)
 - ✓ 借り上げ住宅の子どもたちへのアクセス方法の乏しさ。
 - ✓ 活動が長くなるにつれて情報連絡の行き違いがあり、細かい確認が必要になってきた。
 - ✓ 仮設住宅ごとに環境や規則に差があり、そこに合わせた体制を考える必要性ができた。

(1)仮設住宅の子どもたちへの遊び・学び支援

(土曜日や休日での支援)

・ その他(子ども, 保護者の感想)

子どもたちや保護者, 自治会等から寄せられた感想やコメント

子どもたちが元気に遊んでいる姿を見て, 大人がとても安心した。(保護者)

- 違う学校の子どもたちが仲良くなれた。(保護者)
- 遊びも大事だけど, もっと勉強もさせてほしい。中学生は特に。(保護者)
- 親としても自分たちで声を上げていかなければいけないと思った。(保護者)
- 大学生と遊べて楽しい。(小学3年生)
- 勉強でわからないところを教えてもらえてよかった。宿題ができた。(小学2年生)
- 来てくれてうれしい。また来てほしい。もっと遊びたい!(各仮設住宅の小学生)

...など。

(2)放課後学習支援

(平日放課後の支援)

安達運動場仮設住宅としのぶ台仮設住宅にて, 平日17時~20時頃にかけて中学生を中心に始めた学習サポート。小学生からも参加の要望が上がったため, 現在は小学生も参加している。

・ 寄せられた声や要望, 課題

- 仮設住宅内における子どもたちの居場所, 見守りが必要。
- 土曜日の活動に参加する子が小学生が多かった。
- 狭い仮設住宅の中で, 家族との距離がかなり近い状態にあり, 親の不安や過干渉などの影響を受けやすくなっている。
→夜遅くなくても家に帰らない子どもたちが何人かいた。
- 学習する場を設けてほしい(特に中学生)。
- 学習の支援の中で, 子どもたちの見守りを一緒にしていただいたい。

(2)放課後学習支援

(平日放課後の支援)

・ 仮設住宅の中で勉強することの困難さ

仮設住宅内は一間が4畳半と狭く、隣接する他の世帯の生活音も聞こえてくる状態である。また、今までは自分の部屋があった子どもたちだが、仮設住宅の中では四六時中家族と共に過ごさざるを得ず、年下の兄弟がいたりすると落ち着いて学習できる環境にはなかなかならない。

・ 放課後支援活動に入る目的

学習

気持ちに
寄り添う

(2)放課後学習支援

(平日放課後の支援)

・ 学習支援の流れ

時間	小学生	中学生
16:00～17:00	スクールバスで学校から仮設住宅まで帰る	放課後の部活動等
17:00～18:20	集会所で学習支援	スクールバスで学校から仮設住宅まで帰る
18:20～18:30	おやつをもらって 解散・帰宅	学習の準備等
18:30～20:00		集会所で学習支援

(2)放課後学習支援

(平日放課後の支援)

・ 子ども, 保護者からの声

- 家の中は狭いし, 落ち着いて勉強できなかった(中学2年生)
- 勉強もいいけど, この時間に皆と話すのが好き。(中学1年生)
- もっと勉強したいです。(小学4年生)
- 休憩時間に食べるおやつと, ココアが好き(小学4年生)
- 勉強は嫌だと思ってたけど, 皆でやると楽しい。(小学6年生)
- 塾が近くにないのでとても助かる。(中学3年生)
- 小さい子どももいるので, 落ち着いて勉強できる環境がなくて困っていた。来ていただけると本当に助かる。(保護者)
- 高校受験だけは何とか突破してもらいたい。いくら地震や事故で大変だからと言って, 子どもたちの勉強する環境をなくしてはいけないと思っている。(保護者)

(2)放課後学習支援

(平日放課後の支援)

・ 成果

- 子どもたちとの信頼関係が良好になり, 約束を守るようになった。
- 地域によっては保護者の協力が得られるようになり, しのぶ台仮設住宅に関しては子どもの「育成会」が発足した。
- どちらの仮設でも参加人数が増えてきた。
- 学習支援の取り組みが広く知られ, 他の地域からの支援の要請も出てきた。

・ 課題

- 支援に関わるボランティアやマンパワーの不足
- 避難生活が続く限りは必要な活動であるが、いつまで続けられるかの資金的な見通しが無い。

教育委員会等との連携

夏休み中の浪江町仮設住宅内における小中学生への支援実施予定 | 担当課 児童課 | 171 ページ

浪江町

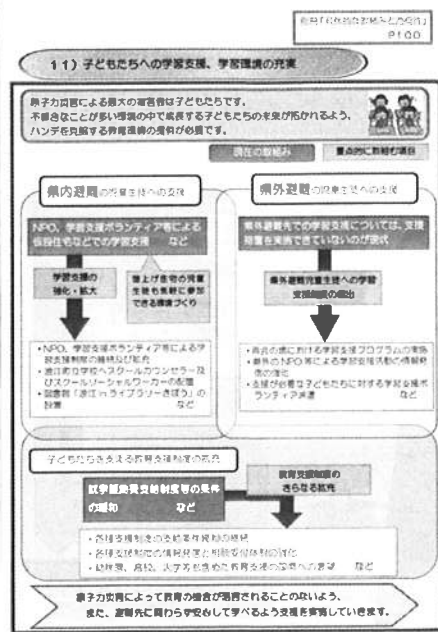
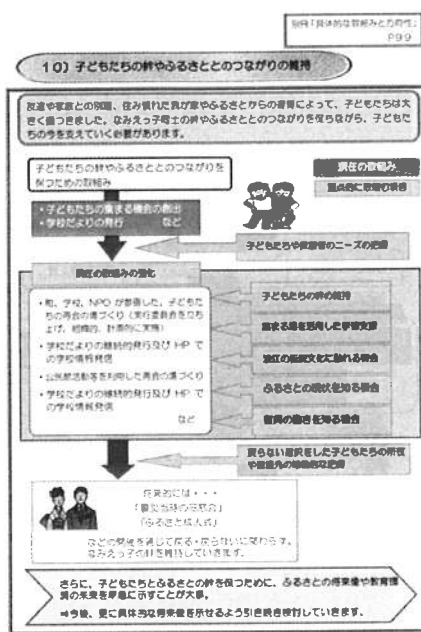
夏休み中の浪江町仮設住宅内における小中学生への支援実施予定

日時	場所	内容	実施場所
8月1日(水) 8月2日(木) 8月3日(金) 8月4日(土) 8月5日(日) 8月6日(月) 8月7日(火) 8月8日(水) 8月9日(木) 8月10日(金) 8月11日(土) 8月12日(日)	浪江町仮設住宅内	夏休み学習支援(個別指導)	浪江町仮設住宅内
8月13日(月) 8月14日(火) 8月15日(水) 8月16日(木) 8月17日(金) 8月18日(土) 8月19日(日)	浪江町仮設住宅内	夏休み学習支援(個別指導)	浪江町仮設住宅内
8月20日(月) 8月21日(火) 8月22日(水) 8月23日(木) 8月24日(金) 8月25日(土) 8月26日(日)	浪江町仮設住宅内	夏休み学習支援(個別指導)	浪江町仮設住宅内

浪江町ホームページでも毎月の実施予定日を広報・周知していただいている。

復興計画への位置づけ

浪江町復興計画【第一次】
中間報告 平成24年8月 より



復興計画への位置づけ

浪江町復興計画【第一次】
中間報告 別冊
平成24年8月 より



まだまだ不足している被災地での子ども支援

- ・支援団体が入っている地域と入れない地域の格差
(支援者・ボランティアの不足・交通手段の確保)
- ・みなし仮設住宅(借上住宅)への支援がなかなか届けられない。
- ・継続して関わり続けることが大事なのだが、継続して支援が続けられる団体・グループがあまりない。
(労力・資金・モチベーション)

まだまだ不足している被災地での子ども支援

- ・本当の復興は、子どもがその地域で育ち、次世代への地域の継承がなされるようになること

しかしながら・・・

- ・除染が進み、放射線量が低減しない限り、子どもを元の町で育てることは難しいと考える親や若い世代がほとんど。



- ・復興への道筋をしっかりと示しながら、子どもを持つ親世代や若い世代が希望を失わないような支援や、つながり、文化を保ち続けられるような支援も必要



ご清聴ありがとうございました